

# KAGAWA GALAXY

## 「吉田源治郎・幸の世界」(33)



### 第33回 シュヴァイツァーと吉田源治郎(2)

上の写真は、ご自宅で撮られた源治郎・幸夫妻の写真である。撮影年月日は判らないが、ノーベル賞受賞の頃のものであろうか、シュヴァイツァーの写真を挟んで、何かの記念の時のものであろう。この写真では、シュヴァイツァーの額の文字も判読できない。

#### 源治郎「シュヴァイツァー『原生林の片隅にて』を読む」(1)

シュヴァイツァーは自伝的な記録として『水と原生林のはざまにて』(1920年、45歳)、『私の幼少年時代』(1924年、49歳)、『わが生活と思想より』(1931年、56歳)などを書き残している。

最初の『水と原生林のはざまにて』は、シュヴァイツァーが1913年から17年までの「第一次ランバレネ滞在」の経験を『ランバレネ通信』を出しているが、その頃の感動的な「アフリカ回想記」として、この著作は忽ち各国語に翻訳されたようである。(野村

実『人間シュヴァイツェル』岩波新書、昭和30年、190頁）『水と原生林のはざまにて』は野村実訳もあるが、源治郎はオールボン神学校在学中、1922（大正11）年に刊行された英訳本『原生林の片隅にて』を早々に読み、深い感動を覚えた如くである。

1924年5月、吉田源治郎はオーボルン神学校を目出度く卒業した後、その年10月から半年余りのあいだ、ニューヨーク市ユニオン神学校チャールズカレッジで聖書・宗教教育及び社会事業を専攻して学び始めるまでの寸暇の時を活かして、今回紹介する標記の「シュワイチエル『原生林の片隅にて』を読む」を書き上げているのである。

論稿の末尾には「1924年7月27日夜中、ニューヨーク州アウボルンにて脱稿」とある。（周知のごとくシュヴァイツァーは、1924年には再びランバレネの「第二次滞在」を始めて、病院の拡張など行い、その後も幾たびもこの地での活動を継続するのである。）

米国で書き上げられたこの草稿は、最初に『雲の柱』第3巻第8号（大正13年10月号）に寄稿され、既述のように警醒社書店より大正14年9月にシュヴァイツァーの最初の邦訳書といわれる吉田源治郎訳『宗教科学より見たる基督教』が刊行され、本稿がその付録として収められたのである。

当初ここでは、「『原生林の片隅にて』を読む」の初めと終わりのみ取り出して置く積りであった。しかし、源治郎のこの作品は、シュヴァイツァーのことを、いくらか纏まったかたちで日本に紹介した最初のものかも知れないのと、当時の吉田源治郎を理解するうえでも、そして源治郎のその後の働きを見る上でも、大切なドキュメントのように思われるので、ここではあえてその全文を、これから3回に分けて収めて置きたいと思う。

現在この著書も、古書でも殆ど入手困難でもあるようでもあり、原文のまま掲載する。なお、賀川豊彦の諸著作の読解において時代的・歴史的場を踏まえることが欠かせないのと同じく、シュヴァイツァーの著作や源治郎の表現の仕方にも、読む側の私たちに同様の見識が求められることは言うまでもない。

早速、第1回として第1節と第2節をお目にかける。

附 録	
一	見棄てられたる門前のラザロ
二	原生林中の思索
三	オグオエの流域
四	中央アフリカ傳道史
五	原生林に於ける人間苦
六	恐ろしい腫脹病
七	兄弟感の體驗
八	自然人とイエスの勝利
九	忙しい無言説教
十	原生林の社會問題
十一	土人間の教育事業
十二	慈善事業か罪の賠償か
十三	苦痛の印記を帯ぶる人々の連帯
十四	生命への敬虔の哲學

附 録

シユワイチエルの「原生林の片隅にて」を読む

吉 田 源 治 郎

一 見棄てられたる門前のラザロ

『私は、ストラスブルヒ大學教授の位置と、文學的作業と、(パリ・バツハ協會の)オルガニストの仕事は一切放棄した。そして中央アフリカへ一醫師として行くことにした。どうしてかゝる決心をしたか?』とアルベルト・シユワイチエルは、その新著、『原生林の片隅にて』(一九二二年發行)の第一頁を書き出してゐる。私は、最近手にした本のうち、こんな印象の深い讀み物を知らぬ。それは、イエスに在る者の血の出るやうな愛の奉仕の記録である。彼はその動機を述べる序に、イエスの譬喩にある『富豪と門前のラザロ』の話の引いて歐洲人の利己的な文明誇負を警しめてゐる。ヨロツバ人は、門前の貧民に一顧をも與へない無慈悲な金持だ。我々は、醫學の進歩に依つて、はい、一切の病苦に對抗する術を獲得した。そして、その無限の恩寵を當り前のことのやうにして貪つてゐる。然し、一度目をこの「文明」の門前に轉するとそこには我々の持つ凡ての病苦―それ以上の病苦にさいなまれて、然も、それに對抗



後にはそれもやれなくなり、止むなく解雇をしたり、それにも拘はらず醫療の要求は各方面から日に増し増えるばかり―粗食と過勞、その上に多額の借金を背負ひ込んで―その結果、夫妻共、少なからず健康を害して、一時、歸歐せねばならなくなつた。彼は一九一七年歸郷して二年間を専ら病氣保養に費した。が、少し健康が回復すると共に、忙しい日が迎えられた。彼は、寧日なく、アフリカの救濟事業の資金を得るための講演旅行に登らねばならなかつた。講演演奏の依頼が、獨佛英各地から來る。一九二二年の春には、オックスフォードのマンズフィールド・カレッジから講演を申込み、彼は、『文明の哲學』を數回に亘つて講演した。バアミンガムのセリー・オーク・カレッジでは、『基督教と世界の諸宗教』を講演した。同じく同市では、パツハの演奏もした―それは、『單に優秀なテクニツクの展示でなくて、禮拜と聖禮典に臨んであるやうな靈的な感激を聽衆に與へた』とその演奏を聞いた有名な音樂批評家に評された。前述のオックスフォード講演は、それぞれ、『文明の哲學』第一卷、『文明と倫理』同じく、第二卷、『文明の崩壊と回復』と題して英語で出版された。

## 二 原生林中の思索

此等の著述の準備は凡て熱帶處女林の沈黙裡の瞑想の間にはぐくまれたものだ。彼はそれについて次のやうに記してゐる。

『私の健康はさして悪いといふのではないが、大丈夫とは云へない。熱帶的貧血が既に私の身に巢喰ふてゐる。それで何でもない事に疲勞する。自分の住宅から治療室への丘を登るのにさへ―たつた四分間かゝるのみであるが―ぐつたり疲れる。それにこの症狀に伴ふて過度に神經質になり易い。その上、齒まで土地の影響のせいかよく痛む。私と妻とは、代り番に齒醫師になつて一時的の治療をやるが、充分な手當は出來ぬ。

然し、幸に、私の心的保健は叙上の貧血や、疲勞に係はりなく殆んど完全に保持されてゐる。あまり疲れを感じない日は、一日の忙しい治療を了つての夕食後、書齋―

と云つても堀立小屋のやうなバンガロウの一室に閉ぢ籠つて、人間思想史研究の一部として一九〇〇年以來私の心を傾けてゐる倫理と文明の研究に没頭する。幸に、之れに要する参考書は、友人のチュリツヒ大學教授ストロール君が送つてくれる。私の書齋の周圍の光景は頗る異様である。私のテーブルは、ヴェランダへ導く格子戸の内側に寄せかけてある。それは、少しでも多量に夕方の微風を捕えるためである。棕櫚が、コホロギとヒキガヘルの騒々しい音楽に伴奏してサヤサヤと鳴る。人跡絶えた原生林からは、異様な様々の叫聲が洩れて来る。私の忠實な犬のカラムバは、ヴェランダで自分の所在を知らせるかのやうに低い聲で唸つてゐる。そして私の足許には、矮少なカモシカがうづくまつてゐる。私はかゝる靜平な環境の中で、私の思想を秩序立てやうとしてゐる。その結果が、多少でも文明の回復に貢献出来たら幸だ。お、原生林の寂莫！ 私はお前に對して限りない感謝の念を抱く。』

夕方の靜かな時間はこんな風にして送られる。晝休み―午後の治療にかゝる迄の一時間は、そして、日曜の午後は、バツハの演奏に時間を費やす。そのオルガンは、彼がオルガニストをしてゐた、バツ・バツハ協會から、特に熱帯地向きに對熱設備を施して、寄贈して來たものだ。彼は云ふ―

『私は發狂的な人間の集團から遙かに離れて、バツハの曲を演奏しつゝ、しみじみと祝福を感じる。私は、今迄にない彼の音楽の深味と意味を見出すことが出来るやうになつた。』と。

原始民族に傳道をする宣教師は、あまり教養が要らぬやうに普通考へられるのであるが、斯の問題に關して、シユワイチエルは全然、反對の意見を洩らしてゐる。即ち、

『宣教師に、充分な教育が必要であるか―勿論である。其人の心的生活、並び知的興味が発達して居れば居るだけ、尙一層よくその人は、アフリカ生活に堪能えることが出来る。此保護なくして人は、間も無く、此處でさう呼ばれる所のニツガーになる。』

即ち其意味は彼が凡ての高尚な見地を失ふことを示す。そして、彼の知的作業が停滯すると共に、ニグロと同じに、つまらぬ事を大事がつたり、つまらぬことに長談議をやるやうになる。神學のことに於ても同じこと、教養の深い程、いゝ。

尤も、或る場合には、深い神學の教養が無くても善い宣教師になれないこともない。その一適例は、我々の傳道地の總主事フェリックス・ファウル君だ。元來この人は、農業技師が専門で、農業方面の一切の仕事を担当する爲に最初オグオエに來たのであつた。所が同時に、その説教者として、また傳道者として、優秀な人物であることが分つて來たので、今では、栽植の指導よりも却つて傳道の方面に餘計時間を費すやうになつた。』

然し原生林の片隅に住んで原始的な生活をやつてゐる氣心の知れない人々に接し、又恐ろしい睡眠病を傳播する蚊や蠅との對抗に日夜を送つてゐると、餘程、注意してゐても、道徳的健康を損ない易い。

それで、こんな處で生活をする人にとつて一番大切な事は、斷えず、高級な讀み物をして手にして思索をする習慣をつけることである。さもないとちぎに心の病人になつて、正常な人間性を失ふ恐れがある。

それで、こちらに住む心ある人は、必ず讀書と思索を忘れない。

『此間も、カヌーで長旅に出る材木屋の訪問を受けたが、別れる時に、私が、「何か本を御貸しませうか」と聞いたら、その材木屋の主人公は、私の申出を感謝しながら、「私も實は舟旅の用意に本をもつて來ました」と云つて、カヌーの舷に一冊の本を持出して、私に見せるのであつた。それは、十七世紀初葉に著はされた偉大なるドイツの神秘主義者であり、靴屋を業としたヤコブ・ベエメの名著、「アウロラ」であつた。』

茲で、私は少しく、シュツイテナルの奉仕をしてゐる中央アフリカ、オグオエ地方について語らなくてはならぬ。

この項は、次回に続く。

(2010年7月18日記す。鳥飼慶陽)